

## 平成 29 年度 第 1 回 横浜市立大口台小学校 学校づくり懇話会

1. 日時 平成 29 年 6 月 24 日（土） 10:00～12:30
2. 場所 横浜市立大口台小学校 校長室
3. 参加 委員 7 名（地域・関係諸機関 4 名 学校 3 名）
4. 内容
  - (1) 校長あいさつ (校長 田川 斉史)
  - (2) 学校づくり懇話会委員確認 (副校長 堀口 直明)
  - (3) 学校経営方針説明 (校長)
    - 学校だからできること、集団だからできることがある。
    - 今あるものをもとにスリムにしたり、幅を広げたりしていきたい。
    - 大口台小学校、職員が明るくて前向き。努力を厭わない。地域に支えられている。大事にしていきたい。
    - わくわくトライ 大口台 地域を含んでいる。
    - 努力目標を示した。意見をいただきたい。
  - (4) 最近の学校の様子 (副校長)
    - 5 年大房岬体験学習
      - ・ 海に関係した活動。地引網体験。海の生き物観察。
      - ・ アジの開きづくり。漁船乗船。
    - 4 年愛川宿泊体験学習
      - ・ 藍染・手織り体験。水源宮ヶ瀬ダムの放水見学。
    - これからの行事
      - ・ 10 月 21 日運動会
      - ・ 校内音楽会。
      - ・ 2 年に 1 回の芸術鑑賞会
  - (5) 授業参観（第 3 校時）
  - (6) 意見交換
    - 4・5 組道徳で、児童は 6, 7 人だったが、先生が 2 人。それぞれの個性があるので、もう一人いたほうがよいのではないかと思った。二人に一人くらいいると理想的。教員の配置が必要。
      - 学生ボランティアを頼んでいる。月・木に入ってもらっている。
    - 発達障害に対する専門家がいるとよい。
      - 個別支援級の在籍が増えているという傾向がある。19 人を 3 人で見ている学校もある。
    - 保護者がそういう方向で動いてくれるとよいのだが。
      - 12 歳まででどういう経験をもっておくと社会に出るときに困らないかということを見極めることも大事。一方で集団で過ごすことの大切さを重視する保護者の考えも理解で

きる。

- 子どもにとって先生は一人。一人一人を目に入れておいてほしい。
- パレットに来ている子どもも多いので参観した。ほかの人との付き合い方。個別級だけでなく、どの子どもにも通じるもの。授業として、先生たちの努力を感じている。
  - 各学年二人ずつなので、少ない人数で学校をまわしていくことの困難さを感じるので、スリムにするのがよいのではないかと思っている。一人一人に目をかけてあげる濃さが変わってくるのではないかと感じる。保護者や地域の方の協力を得ることで解決できると思う。
- 義務教育の学力をつけて、上にあげることが重要。家庭・地域・学校の役割の整理が必要な時期だと思う。すべてを学校のせいにするのは違う。地域にも声掛けしてほしい。
  - 見守りででていると、あいさつをする。じゃんけん。「学校での顔」に興味をもって来た
- 学校でも地域とかわらない顔がある。すごくなごやかな雰囲気です。授業が行われていた。先生がよけいはことを言わず、教えるべきことを教える。すばらしかった。
- 6年生のあいさつはいい。大人のあいさつ。4年生くらいは恥ずかしくなるのか、あいさつをしなくなる。決まった女の子が一人で行く。その子に対して男の子がはやしている。いじめにつながるのではないかと心配。
  - 先生に言えなくて、困っている子にアンテナを立てることが大事。
- コミュニケーション能力。今の子どもがとても苦手。いじめも同じ。その時に子どもといっしょになって話し合う場をつくったほうがよい。ほかの子どもも無関心。真剣に向き合える場をもてば変わってくる。家でも子どもの信号に気付くべき。みんなが自分事として話し合うこと。
  - 例えば地区懇話会で得たことを家庭でも広げる。役員だけで終わらせず、ほかの人たちとリンクしていくことが大事。
- 授業参観では先生たちの工夫が見られた。リズムに合わせて鉄棒など。先生がみんなと一緒にやっていて。子どもたちが元気よく手を挙げて発言している。立ち上がってイスを入れて発言している様子が礼儀正しい。授業を集中して受けている様子が見られた。また、先生の教え方を見て、学ぶことができた。
- 携帯電話、どこまでOKなのか。各家庭の常識の範囲内でやってないと困ってしまう。いったん区切りをつけてもいいのではないかと。各家庭の認識がばらばらで。どこまでいいのか。
- 保護者が理解していない。ここが問題。何が目的なのか明確にすべき。
- 愛川の発表。よく子供たちが聞いていた。体験は本物である。
- 今年度も理科支援員の配置があった。大変助かっている。
- 国語力の不足が誤解をまねくケースがある。相手が見えないと、誤解を招く。大人がしっかりしていく。
- パレットは学校に倣えという感じでやっている。
  - 学校とパレットが同じスタンスならば、保護者が混乱しない。それでいいと思う。
- 密に学校とパレットと情報交換の時間をもっている。

(7) 事務連絡・今後の予定

(12:30終了)